聴神経腫瘍

ワッシーだって、脳外科医者の端くれである。だから、脳腫瘍や脳出血など、メスを握って治療する病気を見落とすなんて考えるだけで身震いする。

67歳のY子さん。「センセ。私、この頃、フワフワするめまいが続く、父親が脳腫瘍で、めまいがすると言っていた。私も?」と訴える。で、めまいで脳腫瘍と聞けば、脳外科医者としては、まず、「聴神経腫瘍」が頭に浮かぶ。それに、聴神経腫瘍によるめまいは、グルグル回る回転性のめまいよりもY子さんが訴えるフワフワした浮動感や不安定感が多いということになっている。

だが、Y子さんには、聴神経腫瘍の症状では最も多い難聴も耳鳴りもないのだ。しかし、めまいが初めての症状でも、それだけで腫瘍を否定はできない。稀(まれ)だが、そういう例もあるのだ。で、頭のMRI（磁気共鳴画像）の検査をする。が、期待?は裏切られ、異常のないきれいな聴神経が写っていた。

聴神経は、聴覚の蝸牛(かぎゅう)神経と平衡感覚の前庭神経でできている。聴神経腫瘍のほとんどのものは、前庭神経の周囲を包んでいる神経鞘(しょう)にできる良性の腫瘍である。腫瘍は平衡感覚を司る神経にできたのだから、理屈の上では、めまいの症状が先に出てくるはずである。だが、理屈通りにいかないところが、病気の不思議なところだ。実は、腫瘍は良性で、発育が遅い。じわじわと大きくなる。平衡感覚が落ちてきても、脳のほうに代償機序が働いて、めまいを感じにくくしているようである。

さて、高齢になると難聴や耳鳴りの人が多くなる。めまいもする。そんな患者さんの中に聴神経腫瘍の人が混じっているかもしれないのだ。ま、疑いを持てばキリがない。結果的には無駄な検査になることもある。だが、疑わなければ、誤診の元だ。脳外科医者は、疲れる。

（石黒修三＝いしぐろクリニック・脳神経外科医：5/9北國新聞掲載）